マリオネットの罠

赤川次郎

文春文庫

文春文庫

262—1

マリオネットの罠　定価 360円

1981年3月25日　第1刷
1982年6月30日　第4刷

著　者　赤川次郎
発行者　杉村友一
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　Printed in Japan

マリオネットの罠

赤川次郎

目次

第一章　館（やかた）　99
第二章　街（まち）　197
第三章　園（その）　271
第四章　宴（うたげ）　316
終　章　332
解　説　権田萬治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

マリオネットの罠

母に

著者

第一章　館（やかた）

1

茅野から小淵沢にかけての一帯は、その夜、濃霧のような秋の雨に包まれていた。ここ、国道二〇号線にも雨が重い灰色の幕を降ろしている。

雨にヘッドライトを黄色くにじませながら、松本から東京へ向かう定期便の大型トラックが水しぶきを上げていた。運転手は、四十がらみの逞しく陽焼けした男で、肉太な指は、大きなハンドルを確実に握りしめている。

「当分上がりそうもねえな」

ため息混じりの独り言だった。長距離便のトラックには交替が乗る決まりになっているが、今夜はその相手が急に腹痛を起こして、一人旅だ。

ばてる心配はなかった。体力には自信がある。だが、出発した時からつけっ放しのカーラジオ

の他、話し相手も気晴らしもない単調さには参った。それに加えてこの雨だ。普通でも夜の走行は昼の倍も疲れる。むろん眠気のせいもあるが、それなら二人の時は交替で、一人の時はわき道へ車を停めて、運転席の背後の寝台で仮眠すれば済む事だ。周囲の景色が間断なく移り変る昼間と違って、夜は単調で、長い。せめて、晴れて視界が開けていれば、町の灯を見て、どの辺を走っているか分るのに、こんな雨の夜は最悪だ。スピードも抑えなければならないし、そのせいで勘も狂って、目的地がいつになく遠く思える。

男は少しスピードを上げた。今は、ほとんど人家のない林の間を縫っているはずだ。この十五分ほど、すれ違う車もなかった。

「畜生！」

意味もなく悪態をついた。何か言わずにはいられなかったのだ。しかし降り続く雨は、男の気持など一向に気に止める様子もなかった。

男がそれに気付いたのは、それがライトを反射して、きらりと光ったせいだった。はっとした時には、もうそれは、トラックのずっと後方に消えていた。男は一瞬ためらってからブレーキを踏んだ。――ビニールのレインコートだ。それも目のさめるような赤だった。

男はハンドルに両手をのせて、バックミラーを見つめた。やがて雨の中から、人影がおぼろげに見え始め、それは赤いレインコートとなり、さらに、若い女になった……。

ダッシュボードの時計は、すでに午前一時半を指していた。今時、一体どこへ行くのか、しかも一人で。車の故障に違いない、と思った。次のスタンドまで、まだかなりあるだろう。乗せて

行ってやるか。こんな晩だ。誰か側にいてくれれば、こっちも気が紛れる。それが若い女なら、なおさらだ。

女は赤いレインコートを着て、フードを頭にかぶっていた。傘はない。いや、荷物もなかった。雨の中を、急ぐでもなく、ごく普通の足取りで歩いて来る。

男はドアを開けてやろうとして、女がトラックの脇をそのまま素通りしてしまうのを見て唖然とした。トラックなどまるで目に入らない様子で、じっと前方を見つめたまま歩いて行く。

「何だってんだ？」

男はあっけに取られて呟くと、窓を降ろして、大声で呼びかけた。

「おーい！　乗らないのか！」

女は立ち止まって、振り向いた。ヘッドライトを浴びて、まぶしげに目を細めると、しばらくトラックを眺めてから、ゆっくり戻って来た。

「……さあ、乗れよ。一番近いスタンドまで十キロはあるぜ」

女は礼も言わずに乗り込んで来た。

「コートは脇に置いときな。なに、少々シートが濡れたって構わねえ」

水がしたたるコートを脱ぐと、女はシートに浅く腰かけて、背を後へと大きく倒しかけた。グレーのセーター、えんじのパンタロン、という服装に、小柄で細い身体を包んでいた。男は、彼女を二十五、六歳とふんだ。濡れて寒いのか、顔が青白い。

「毛布でも貸してやろうか？　寒いだろう」

「いいえ、結構――ありがとう」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

囁くような低い声だった。男はともかく彼女が口をきいたのでほっとして、微笑した。

「ま、寒かったら後の寝床にあるから、使いなよ」

女は何も答えなかった。

トラックが静かに雨を押しのけて動き出した。

しばらくどちらも無言だった。男が時折ちらちらと盗み見るのを知ってか知らずか、女は水滴のひしめくフロントグラスを見るともなく見ている。線のきつい、彫りの深い顔立ちだった。切れ長の眼、薄い唇、真直ぐに通った鼻筋は、外国人の血が入っているのかと思わせた。髪はつややかに湿って、長く肩へ流れ落ちている。

何を話しかけていいものやら、男は戸惑っていた。女の無表情な顔つきが、話しかけようとする気をくじかせた。

女がフロントグラスを見たまま言った。

「タバコ、もらえる？」

「チェリーだぜ」

男はジャンパーのポケットから、皺くちゃになった吸い残しを取り出して、女に一本抜かせると、ライターで火をつけてやった。

彼女は煙をゆっくり吐き出して、シートにもたれた。やっとくつろいだ様子で、微笑さえ浮かべている。

「どこまで行くんだい？」

男が訊いた。

「別に」
「車の故障なんだろう？」
「そんなところね」
気のない返事だったが、冷たくはねつけるような口調ではなかった。
男は改めて彼女を見直した。タバコを指に、両腕を軽く組んで、いくらか物憂い様子で前方を見つめている女の姿態には、若々しさに似合わぬ、成熟した女の匂いが漂っている。男の視線が素早く女の体をなぞった。ぴったりとしたセーターが、細身の体と、胸の膨らみを忠実に描き出している。
突然、欲望が燃え立った。この前、女を抱いてから、もう何カ月になるだろう。妻と死別して、すでに四年だ。仕事で立ち寄る温泉町で、商売女を抱くことはあったが、こんなに若い女の体には縁がない。彼女が同意するとは思えなかったが、一旦燃え上がった火は消えなかった。深夜、雨の中で、他の車の影もなく、男と女と、二人きりだ。――そうなって何が悪い？　男は思った。男と女が二人きりになれば、そうなるものと決まってるんだ。こんなか細い小娘だ。男の力に敵うわけもない。それに――そうだ、こうしてタバコなど喫っている様子では、まんざら生娘でもないかもしれない。そういえば、シートにもたれる姿にも、どこか男を誘うような、含みが見えるのは、錯覚だろうか。殊更に正面を見据えつつ、男はたぎり立って来る欲望を意識していた。
ライトに、ちらりと、見なれた標識が浮かんだ。〈××市へ15㎞〉――この標識を一キロばかり行くと、よく一人旅の時、トラックを停めて仮眠を取る場所があるのを、男は思い出した。国道からわきへ入り、すぐ折れて林の中へ潜り込む。木々に囲まれて夏の最中でも涼しく、人目につ

かず、国道の騒音が嘘のように静かな場所である。あそこなら……。
一分足らずで決心しなければならない。男はちらっと隣の女を見る。暴れるだろうか、おとなしく言うなりになるだろうか。ハンドルを握る手に汗がにじんだ。わき道がライトの中へ今にも飛び込んで来るかもしれない。やめた方がいい。警察へ訴えでもされたら面倒だし、今さらくびになったら、どうするんだ？　だめだ、だめだ。
その時、わき道が目前に見えた。
自分でも気付かぬうちにハンドルを切った。トラックは大きくかしぐように、わき道へすべり込むと、すぐに再びカーブして林の中へのめり込んだ。
トラックがひと揺れして停まり、男がエンジンを切った時、女は初めて顔を向けた。微笑は消えていたが、その表情に、恐怖も驚きもなかった。予想していた、とでもいった様子である。ヘッドライトを消し、車内を明るくすると、男はラジオを止めた。雨の音が急に高くなって二人を包み込んだ。
男は威嚇するように娘を見下ろしたが、彼女は平然と男の視線を受け止めた。重苦しい沈黙は数秒で終って、女は手にしていたタバコを灰皿でていねいにもみ消すと、軽く息をついた。
「――そこで？」
女は背後の寝台へ視線を投げて言った。男はほっと笑顔になって、
「ああ。寝心地も悪かないぜ」
「ならいいけど……」
寝台は色の褪せたカーテンで運転席と仕切られている。娘はカーテンを開けて、一人用の寝台

を見た。
「ずいぶん狭いのね」
「充分さ。重なって寝るにゃ」
男は小声で笑った。
「先に上がるわ。いいって言うまで待っててて」
「分った」
女は、窮屈そうに身体を曲げて寝台へ這い上がると、カーテンをきっちりと端まで引いた。男は大きく息をついて、やってみるもんだ、と思った。なに、結構あの娘も慣れてるようだし、問題はあるまい。なまじ生娘などより扱いやすい。カーテンの向こうで服がすれ合う音がして、男の欲望をかき立てた……。
「いいわ」
声に応じて、男はシートに上るとカーテンを一気に思い切り開いた。思わず息を呑む。一糸まとわぬ裸体が横たわっていた。細いが、貧弱ではない。みごとな体だった。彼女は別に手でどこを隠すでもなく、右手を体に沿ってのばし、左手を腹にのせていた。
「……たまらないぜ」
声が上ずっている。
男は寝台へ這い上がって、女の体に乗った。
彼女の足下に、脱いだ服を包んだ赤いレインコートがていねいに丸めてあったが、男はまるでそんな物には気がつかなかった。

男が息を弾ませて、女の胸に顔を埋めると、女は左手で男の首筋を撫でさすりながら、頭を載せた小さな平たい枕の下へ右手をそっと滑り込ませた。隠してあったものをつかんだ右手が、体の脇を走って男の背へ回る。音もなく、なめらかな、蛇を思わせる動きだった。男がぐっと身を乗り出して、彼女の唇をふさいだ。女の左手が男の頭を押え、右手から、すっと銀色の刃がのびる。剃刀をしっかり握り直すと、刃を男の首筋へ降ろす。男の重みにさからいながら、大きく息を吸い込んで、彼女は剃刀の刃を男の首筋に押しつけると、自信に溢れた外科医がメスをふるうような力強さで、真一文字に引いた。

——急に、雨が激しさを増した。木々の枝は雨の勢いで震え、囁くようだった雨音は、群衆のどよめきにまで高まった。雨のはね返りが白い水煙となってトラックを包み込む。

突然、クラクションが鋭く雨を突き刺して、やんだ。後は再び、雨だけが騒いでいる。

彼女は寝台に起き上がって、運転席を見下ろした。転げ落ちながら、ハンドルにぶつかってクラクションを鳴らした男の体は、今、運転席のシートに横たわっていた。眼を見開き、口を半ば開けたまま、驚愕が劇的なデスマスクを仕上げている。その首筋がぱっくりと赤く傷口を開いていた。女は、全身に血を浴びていた。運転席の中もシートといわずカーテンといわず、天井までも、血で塗りたくられている。フロントグラスの内側を、泡立った血潮がゆっくりと流れ落ちて行く。

女は寝台から降りると、平然と男の死体を踏みつけて、ぬるぬるとした血溜りに足を取られながら、ドアを押し開けた。剃刀を男の胸の上へ無造作に投げ出すと、雨の中へと降り立つ。

雨は一層激しさを増して、アスファルトの舗装を打ち砕かんばかりの勢いである。水煙が道に

低く霧のように漂って見える。

女は林の中を抜け、国道へ出て来て立ち止まった。全裸の体を、叩きつける雨にさらして、動かない。目を閉じて、空を仰ぐと、降り注ぐ雨が、全身に浴びた血を洗い流しつつ、急速に体の熱を奪って行く。彼女は激しく身震いして、しかし、なおも立ち続けた。やがて体が冷えきると同時に、体の奥底から熱気が噴き上げて来るのを感じて、彼女は大きく息をついた。微笑が浮かんだ。そしてそれはやがて、陶然と酔うが如き法悦の表情へと変って行った。

行き交う車の影もない深夜の国道のただ中に、娘は一人、全裸のまま雨を浴びて立ち尽くしていた。

2

重くたわんだ鉛色の雲の下を、一台のコロナが走っていた。雨の気配を含んだ冷たい風が、細く開けた窓から吹き込んで来て、上田修一はちょっと身震いした。秋だというのに、この陰鬱な空はどうだろう。

陰鬱といえば空ばかりではない。左右には殺伐とした雑木林が、もう何キロも続いて、気を滅入らせた。国道を行く車も数えるほどで、まるで荒涼たる原始林を走っているような気になる。

ちらりと腕時計に目を走らせて、かれこれ二十分は走らせたな、と思った。もう見えてもいい頃だ。電話の相手はどう言ったのだったか……。

「茅野駅前のレンタカーをあなたのお名前で借りておきますから、国道二〇号線を甲府方面へ走

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com